〔書　評〕

『群馬県吾妻郡六合村の方言』
六合村教育委員会編

『長野県史　方言編　全一巻』
長野県編

『大分県史　方言篇』
大分県総務部総務課編

大橋勝男

以下の叙述に際し、標記の三著を、次のように略記する。

『六合』――『群馬県吾妻郡六合村の方言』
（評者注　村名「六合村（くにむら）」。著者中條修・篠木れい子）
『長野』――『長野県史　方言編　全一巻』
『大分』――『大分県史　方言篇』

はじめに

近来、全国諸地方団体において、地方史・誌の編纂の動きが活発である。それは、いわゆる地方の時代なる風潮とも相俟ち、自らの郷土を大事にし、見直し、活性化しようとする動きの一環ともうかがえる。

その中の文化篇・民俗篇などの中で、ないしは、時に独立的に、当該地方の言語の調査記述がなされつつある。ここに対象とする三著のうち、『長野』『大分』は、その前者として、『六合』は、その後者として成るものである。

方言研究が細分化してきている今日、日本語の地盤・地肌そのものともいうべき、地域語を、あるがままに、総合的かつ体系的に細述・記録することは、誠に意義深い。特に、日本の国の諸方面にわたる激動・激変の中で言語の多様化と画一化との著しい今日においてこそ、このような地道で基礎的な作業の重要性と意義とは、極めて大きいものがある。

その意味では、この種の労作は、その大小精疎を問わず、多地域にわたり多数編まれることが切願される。したがって、その編まれたものを評するとしても、それは、批評するというよりも、その労と成果とを賀し、全国的にこのような編纂活動が隆盛方向に向かうよう助長すべき機能を果たすべきであると考える。基本的には、方

法と記述とが妥当で正確でさえあれば、それでよしとすべきものと考える。

それぞれの場合ごとに、地方団体なりの諸事情があろう。編纂の方針や、それへのウェイトのかけかた、規模や予算や年限、スタッフ等々、事情は様々であると考えられる。その事情なりの状況や範囲で編まれるのが地方史・誌である。それなりの活動が、それぞれに尊く、その成果が尊いとされるのである。

ここでは、これら三著を取り上げ、それに基づきつつ、今後のこの種の編纂の望ましいあり方を探り、今後に資することを目ざす姿勢で、拙い評述の責めを果たすことにしたい。

一

これらの編纂活動は、多くの場合、地方自治体の中に編纂室や編纂委員会が設置され、予算が付き、民間の専門家等が調査委員として委嘱されるという形でなされる。いわば、官民協同作業という形をとる。

この方式は、大きな利点を有している。ここに評しようとする三著も、その利点がいかにも有効に結果した好成功例と言える。一つは、何よりも先ず、編纂・調査関係者をはじめ、地域住民・教示者が郷土愛に裏打ちされていること。二つに、公の予算が計上され経済的支援がしっかりと保証されること。三つに、五年計画とかそれ以上とかにわたり、じっくりと時間がかけられること。四つに、教示者の紹介や準備が、官側の労で保証されることが多く、かつ、上記郷土愛とも相俟ち、住民の理解・協力が好意的・積極的に得られやすいこと等である。

これらの利点は、評者も一フィールドワーカーとして、実に願ってもない、垂涎の好条件である。評者も、新潟県下諸郡市史編纂の言語部門を担当してみて、このことを痛感してきた。

当三著は、いずれも、十分に時間をかけ、多数の被調査者や参考資料に当たり、言語の多部面にわたり行きとどいた調査を行い、整然と細述している。それぞれ、特色を異にしつつも、いずれも、今後の記述編纂のための、基本的な、一種の雛型・マニュアル的なものとなるべき性格と資格とを有していると言える。

二

各著の内容の大要は、幸いにも、著者等による要説が、まえがきやあとがき部にある。今後の地方史・誌、言語部門編纂の参考のためにも、先ずは、それらを、ここに引用対照してみよう。

『六合』　本書は、第一章　調査の概要、第二章　六合村の自然と社会、第三章　六合村方言の概説、第四章　六合村方言の語彙、第五章　自然談話の記録、第六章　方言語彙資料の六章構成である。その中心は六合村方言の音韻・アクセント・文法の各体系とその特徴を詳しく説明した方言概説の第三章と、高年層から若年層へとことばが移り変わって行く姿を、方言地図や図表を使って説明し、その要因を考察した社会言語学的研究と、語彙の体系や特徴的な語彙について論述した記述的研究とからなる第四章である。それに言語環境としての六合村の自然と社会、および高年層の自然談話と方言語彙資料を加えた。（「はじめに」P.3）

『長野』　本書は3部から構成されています。「第1部　長野県各地の方言」では、各地方方言が均斉のとれた体系を構築しながら、他方言に影響を与え、また、影響を受けているさまを明らかにしました。「第2部　長野県言語地図」は、読者に方言の生成、闘争、衰退、放射、伝播などの真相を語りかけてくれます。「第3部　テキスト方言訳」では、要素に分解しない生きた談話語の実態を髣髴とさせることでしょう。（「あとがき」P.i）

『大分』　まず序章と第一章で大分方言を概観し、第二章で横の広がりを、第三章で縦の流れを幾つかの実例で押さえることにした。これでまずまがりなりにも一応の概観は出来たはずだが、言語文化は複雑だからなお多くの漏れがある。その中から七つばかりの課題を選んで七・八章の特論に収めた。九章には「めぼしい方言」六〇〇語を選んでみた。一〇章の「大分県方言文献目録」は三五〇点ばかりだが、これを公表することによって県内外の読者から文献情報がもたらされることであろうことを期待している。また本巻の性質上不可欠なるものとして「索引」を添えた。（「あとがき」P.593）

三

三著に共通する特筆すべき特徴は、関係者の当研究・当著にかける情熱のなみなみならぬことである。それがひしひしと伝わり、胸が熱くなる。深い感動を禁じえない。学者としての良心と探究心、そしてやはり郷土愛のしからしめるところなのであろう。

とりわけ『長野』は、馬瀬良雄氏の一騎当千ともいうべき奮起奮励、目を見張るものがあり、氏の熱い思いのたぎりが全篇にわたって放射している。『大分』においては松田正義氏に、それを見いだす。他方、『六合』にあっては、中條修・篠木れい子氏の当村や人々に対するいつくしみの情が溢れている。

それは、たとえば、県下や村の住民を読者対象としているのにもかかわらず、何等手抜きや迎合などすることなく、ひたすら真摯に、学問的良心に徹しつつ、高質の調査・叙述を全うしている点に如実に現れている。極めて重厚、学術的にも第一級の内容と言える。『長野』が平成四年度の新村賞に輝いたのも、当然である。

また、たとえば、調査や叙述の分野・方法等が実に周到である点に、如実に現れている。上記二の内容要説に見る如く、三著いずれも記述的研究と地理学的研究とを十分に相即させている。そのどちらか一方だけでも、当該地方史・誌として遜色がない。記述的研究によって、当該地方語が音声・文法・語彙面にわたって、分析的・体系的にきちんととらえられ、それと並んで、地理学的研究によって、当該地方語が地理的な広がりとして相対的にとらえられているのである。しかも、『六合』においては、臨地アンケート調査ながらも、小学生以上の村出身者全員について、『長野』では、アクセント項目については高年層・若年層について調べている。『大分』でも、全県調査は、通信調査（音韻面については臨地調査も）ながら、老年男女、中学生男女各々一名ずつの調査をしている。三者各々、可能の範囲の最善を尽して、地理的に横に見とおすと共に各地点年代的に縦に見とおすという努力も怠っていない。

『大分』は、全県的調査のほか、藩境沿いの集中的な調査も、岡・臼杵藩境、二豊国境について行っているという念の入れようである。

調査地点に関しても、『六合』は、村内六集落を主としつつ周辺もやや含め二十数地点、『長野』は、全県細密に四二四地点、『大分』も全県調査は各市町村一地点計五八地点、岡・臼杵藩境沿い三七地点、二豊国境一六五地点という緻密度である。

これに関連して、さらには、時代的・歴史的に縦の流れとしてもとらえようとする努力をしている。『六合』『大分』がそれである。いずれも、江戸末の当該地方語の古記録文書と現代の言語状況とを対比追跡的に見、残存と変遷とを明らかにしようとしている。『大分』では、それを含め、「変遷調査」なる章の中で「若年層のアクセント変容」「動詞の変遷」「大分方言三十年の変容」をとり扱ってもいる。

そしてさらには、当該言語を生きた姿そのままにとらえようとする努力もしている。『六合』『長野』がそれであり、『六合』では「自然談話の記録」として、『長野』では「テキスト方言訳」として。一方で当該地方語を分析的・体系的にとらえ、一方で総合的・生活的にとらえようとしているのである。

地方語は、地方の生活者により、日々の生活に用いられているものである。その生活を支えて生きてはたらいている様を、さながらにそれとしてとらえ記録することこそ、最基本要事であるに相違ない。分析は後の人、他域の人でもできるのである。なお、「テキスト方言訳」は、ひだ深い諸地域に分かれる山岳地方の特性に即した、各ブロック方言の比較の便を考慮した苦肉の方法と考えられ、これとして周到なのだと評しうる。

『大分』の、三四三点に及ぶ詳密な「大分県方言文献目録」、その著者別索引や地点別文献番号分類地図等、文献へのなみなみならぬ配慮、特論という形で、地名・姓氏、動・植物、昔話、民謡・わらべ歌、しゃれことば・ことわざ、家号、文芸・豊後浄瑠璃、あいさつことば、国語教育等々をも地方語の見地から大事にすくい上げていることなども、いかにも周到であり、意欲的であると評せざるをえない。

評者も、新潟県下の地方史・誌言語部門の編纂にいくつか関わる中で、これらの諸項への配慮も重要であると感じている。その経験から、さらに付け加えれば、地名のアクセント、田畑等の名称、人の呼称・名称・人称代名詞、名付け、子どもの遊びことば・唱えことば、なぞなぞ、数の言い方・数え方とアクセント等も対象となりうる重要分野ではないかと考える。

ともあれ、これら三者は、それぞれに、現代の地方日本語の、広く豊かな、確かなとらえと定着をし果たした、高質な記録として、かけがえのない意義と価値とを有する玉篇であるにちがいない。これそのものが、確かな方言学・言語学の成果であると同時に、今後のそれらへの豊かな寄与が予想されることは、言うまでもない。細分化し、部分化しつつある現代の方言学は、もう一度この原点に立ち返り、確かな方言実態の全体像に正対し立却する学問へと蘇える必要のあることを、促される思いがしてならない。

その意味において、これらのいとなみと成果とが、単なる地方活動・行事としての地方史・誌の編纂それとして充足し、埋没してしまうことなく、日本方言学全体の中でのいとなみ・成果として開かれたものとなることが切願されるのである。

なお、これら三著の目次を統合的に受けとめるならば、それは、単に今後の地方史・誌言語部門編纂のあるべき姿を指示してくれるにとどまらず、方言学の研究対象・方法、学的体系を追究する上で

も大いに示唆を与えてくれるものとなる。

四

長野県は、東西方言の境界の主要地帯である。日本列島の地理的にも言語的にも中央的位置を占める長野県、そしてそれに北接する群馬県吾妻郡六合村。そのような重要な位置を占める地方の言語が、方法を尽くし微細にわたって体系的にかつ地理的に記述究明された意義は大きい。『六合』も、対象地域は一村と小さいながら、信州と越後と関東とを結ぶ絶妙な位置にあり、学的に極めて貴重有益な機能を果たしている。二者によって、中部・関東方言という日本列島中央の言語現況が、着実に定着された。その意義は、学的にも歴史的にも極めて大きい。

東西方言の境界については、つとに国語調査委員会『口語法調査報告書』（一九〇六）の「口語法分布図概説」があり、その約半世紀後の牛山初男の研究がある。そしてこの度の『長野』である。さらには、国立国語研究所の『日本言語地図』、とりわけ目下刊行中の『方言文法全国地図』がある。もし、さらに、『長野』のような研究が、西接県をはじめとする周辺県についてなされるならば、その時こそ、東西方言境界の課題は、現状としても歴史的動態としても最も望ましく究明される時である。評者としては、少なくとも岐阜県において『長野』同様のものの編まれることを切望したい。

『長野』『六合』の意義は、また、言語地理学的な格好の討究的寄りどころとなるところにも求められる。先にも触れた如く、山岳国長野県は、谷筋が縦横複雑に綾なし、言語の流動と保存、自己変容等々がこの上なく複雑である。言わば、言語地理学の実験場的るつぼである。各ブロックの体系的精密な記述と、全県四二四地点に及ぶ細密地点についての音韻・アクセント・文法・語彙、老五四七項目、若三六二項目の調査結果は、その討究に十分に応えてくれるにちがいない。当著には二〇〇葉が掲載されているにとどまるが、これとは別に、全葉の公刊を期待したい。なお、『六合』が、『長野』の延長とも補充ともして有効であること、言うまでもない。

他方、列島西周の九州方言の一つが、『大分』により確固たる定着究明を見たことは、偶然とは言え、『長野』『六合』との好対応を得て、誠に貴重であり意義深い。特に周辺域語の重要な特徴である日本語の古い姿を、諸部面にわたって残存させている姿が、多面的に調査・記述されている点は、国語史研究の立場からも極めて有益であり、意義深い。特に、四つがな弁、三行弁、開合、連声等の音声現象の記述は、有益である。

たまたま、長野県北東の信越国境栄村秋山郷には、越後内陸部と共にオ母音音節の発音に開合の区別がある。中世の、いわゆるオ段長音の開合の区別は、現代、本州ではほぼそれらの地方及び佐渡に残存を見るばかりである。『長野』には、その秋山郷の実態が記述されている。そして、他方、離れて九州に当現象が残存する。それが『大分』にも記述されている。両者が、たちどころに比較対照できるとは、何とすばらしい醍醐味であろう。たとえば、このようにである。

秋山郷	「用事」[joːʒi]	「楊子」[joːʒi]
大分	「土用」[ドュー]	
秋山郷	「冬治」[toːʒi]	「湯治」[toːʒi]
大分		「湯治」[トージ]

ただ、このように、いざ比較作業をしてみると、双方で記している調査語が異なっていたり、注目範囲が異なっていて、右記のように不揃いな対照しかできないというもどかしさに遭遇する。『長野』では同音異義名詞五ペア、プラス三語の記述をしているのみである。『大分』では、名詞のほか『名詞＋を』、動詞、形容詞にもわたって記述をしている。しかし『大分』は、名詞のところを見ると、開音語は二語しか記しておらず、合音語は「大〜」という語三語、ほか六語の計九語が記されているというありさまである。同音異義名詞のペアの対応への顧慮はなく、ここからは、その実音相の対応は知られない。もし、最底、双方の内容を統合したような調査・記述が双方においてなされていたならば、オ段長音開合現象に関する日本列島上での現況とその相対関係の究明、ひいては、当現象の列島上での歴史的展開史の推究等が、より有効に実践しうることになったであろう。

ここに、この種の編纂活動の限界・問題点を見いだすのである。これらの活動は、一般に個々独立的になされる。それ、それに結実したものは尊く有益である。ましてや、当三著の如く学的にも最善を尽して成されたものにおいてはなおさらである。ところが、それですら、かくの如くである。独立的に為される編纂活動故の限界というほかない。

しかし一方から言えば、郷土のための編纂である。それを満足すれば、それとしてその編纂の目的と使命とは充足している。それ以上のことは、当方のあずかり知るところではない。地方史・誌編纂とは、そのような性格のものである。このような限界論は、見当違いな贅沢論である。それ以上のことは、勝手に必要な人間が自分で心ゆくまで調べればよい。

このあたりの議論について、今後の編纂活動では、考えてみる必要が大いにあるように思う。

その是非はともあれ、せっかく行う編纂である。先行の関係部をよく見合わせ、よりよい討究分野・事項、記述体系、調査・分析法を志向することは、今後きわめて重要なことである。

五

三著を拝見拝学していると、それぞれに、人の起用ということについて深く考えさせられる。『六合』では、中條・篠木ラインとでもいうべき先輩後輩の融和的な一貫した活動が光る。『長野』では馬瀬良雄氏という、『大分』では松田正義氏という強力な中心的推進者がいて、自ら専心邁進すると共に、多数の協力者を適材適所に生かし、荘大な当該県方言記述の殿堂を構築している。

『長野』での学生教育（授業）との結びつけ、その演習としての調査・言語地図化は、実に時宜を得、まさに一石二鳥の効を果たした。今後への一つの方向を示唆するものである。また、『長野』『大分』は、県外からも優れた専門家を多数協力者として得ていることも、その研究の充実に大きく貢献している。その一端を記せば、『長野』の平山輝男・佐藤亮一・加藤和夫氏等、『大分』の柴田武・鏡味明克・小野米一氏等の如くである。特に『大分』では、章節による執筆分担方式を徹底しているだけに、その力が、そのまま戦力となっている。これらのことも、今後への一つの示唆となる。

しかし、何よりも、三著の大きな特徴は、それら基幹推進者が、いずれも、当該県方言についてのライフワーク的研究行の延長とも

総決算ともいうべきものとして、当著に取り組んでいるということである。いずれも、これまでの長い研究の蓄積が随所に生かされ、組み込まれ、さらに発展・充実されているのである。

その際、これまでに行われた、NHK「方言の旅」シリーズ、文化庁の「全国方言収集緊急調査」、平山輝男氏代表による「全国方言基礎語彙調査」、飯豊毅一氏等編の『講座方言学』、紫田武氏代表による「言語の標準化」、杉藤美代子氏代表による「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」等を通じての基幹推進者各氏の経験とその当該県に関する実績とが大きく当著に生かされ、支えとなったことを特記せねばならない。これらの各項の日本地方語研究史上に果たした学的意義と貢献の偉大さが、当著を見ることによっても、今さらのように強く認識されるのである。

六

地方団体において編纂される地方史・誌は、とかくその県や村の郷土史・誌として充足し、閉塞してしまうおそれがある。たまたまここに取り上げた三著は、言語部が特立して一本となりえているものである。このような場合は、まだしもである。このようなものはむしろ稀であって、一般には他の諸部門と合わせて一本となっている。こういうものが、このほかにどれほどあるかしれない。そのようなものは、なかなか全国の目に触れにくいし、購入しにくい。ここに、これらの編纂の問題点・悩みがある。

当三著は、単行本である。入手の便も合冊本に比べれば、便宜である。これほどに優れた各著。ぜひとも地方に眠ることなく、全国に広く活用され、日本方言学界に十分に貢献することを願ってやまない。

各編纂者におかれては、これまでの長く険しいご尽力に、心からの敬意と喝采とねぎらいの誠を奉げ申し上げると共に、これをステップとして、さらなる深化と発展との出発となることを祈念申し上げる次第である。

（『群馬県吾妻郡六合村の方言』　平成三〈一九九一〉年三月三十日発行　六合村教育委員会刊　B5判　三二五ページ、『長野県史　方言編　全一巻』　平成四〈一九九二〉年三月十日発行　社団法人長野県史刊行会刊　B5判　九九五ページ、『大分県史　方言篇』　平成三〈一九九一〉年三月三十一日発行　大分県刊　A5判　六〇六ページ　非売品）

――新潟大学教授――

（平成五年四月二十日　受理）